

基調講演

のれんを守る，のれんを育む

畑 正高 氏

(株式会社松栄堂 代表取締役社長)

大山 それではお時間になりましたので、これから基調講演を始めさせていただきますと思います。今日、基調講演に、株式会社松栄堂の代表取締役社長、畑正高様にご講演をいただきます。まず最初に畑様のご紹介をさせていただきます。昭和29年京都生まれ、大学卒業後に香の老舗の松栄堂に入社をされます。平成10年に同社の代表取締役社長に就任をされます。香文化の普及、発展のため、国内外での講演、文化活動にも意欲的に取り組まれておられます。平成16年、ポストン日本協会よりセーヤー賞を受賞され、環境省のかおり環境部会の委員、それから京都府の教育委員会の委員長をなさっておられました。そして同志社女子大学の非常勤講師も務められておられまして、著書には淡交社から出されている『香清話』、それから『香三才』、そして関連書籍として『香千載』などを出されておられます。それでは、今日はタイトル、「のれんを守る，のれんを育む」として、畑社長にご講演をいただきます。それでは畑様、よろしくお願いたします。

畑 皆さん、こんにちは。今日は貴重な時間をいただきありがとうございます。今ご案内いただいたように、「のれんを守る，のれんを育む」というタイトルにいたしました。おつき合いいただいたら嬉しく思います。私の会社は京都で、お香という日本の伝統的な香りを作ってる会社でございます。烏丸二条という、同志社大学の場所をずーっと南へ、京都駅のほうへ行っていたく

と、京都御所の同志社とは反対側にあります。ぜひお立ち寄りください。伝統産業といわれて京都にさまざまな業態があるんですが、その中の一つと認識していただいていると思っています。およそ創業から300年ぐらいの時間は流れています。それは事実として大事にすべきことですが、何ら将来を保証してくれる約束でも何でもないわけですから、30年後に対する約束ではないという、大きな勘違いをしないようにというのは、常に自分自身に言い聞かせてることです。それから、不易流行、温故知新、いろんな言葉がありますが、常にイノベーティブな発想と創造力、そういうものを大事にしないとイケないと、社内では話題にしています。

お香というと、皆様はどんなイメージをお持ちでしょうか。私たち、私も含めて街に出かけると一人の消費者なんですが、さまざまな情報、実は情報といいながら断片的な情報、思い込み、勘違い、理解不足、迷信というふうな、当事者からいうと困ったなと思うような状態で、消費者の皆さんはいてくださるわけです。私の立場からいうと、お香というのは日本の伝統的な香り、五感の一つの嗅覚にかかわり続けてきた、非常に幅の広い生活文化と考えています。例えばにおい袋もお香なんですね。伝統的な茶の湯で使っていただくお香とか、香道という専門的な芸道文化もあります。そして、線状にして作ることができるようになって、お線香というものが生活革命を起

こした。それが江戸時代に広まって、私たちのような生業も生まれたと思っています。

悲しいかな、お線香というのは仏様だけのものだという大きな勘違いを持たれてしまうようになった歴史があります。私が40年ほど前に会社にかかわってからは、線状のお香こそが実は日常に一番使いやすい、合理的なお香だということを啓蒙活動をさせてもらうのが、私の仕事のようになっています。いろんな切り口があるんですが、まず歴史に学ぶ楽しさということを常に実感すべきだと思うんです。それは逆に言うと、歴史を持たない人たちというのが世界にはいらっしやるんだという気付きです。私は幸せなことに京都で生まれ育って、今も生業を京都でしているのですが、別に京都だからじゃなくて、日本文化圏というのをまじめに、一歩立ち止まって、自分の背景に学ぶ姿勢を持てば、日本文化圏というのがどうい文化圏なのか見えて来ます。それはもう本当に計り知れないほどの深いコンテンツ力を持つてるわけです。歴史を持つ者の幸せというものも常に実感するわけです。自分も後ろに一歩、二歩とバックワードすることで、自分の今立ってる場所というのは、また見え方が変わります。すると、実は先輩世代の人たちは自分の後ろにトンネルを掘ってられたとか、鉄橋を架けてられたとか、どこへ行こうとしておられたという、先輩たちの活動の方向も見えてくるわけです。すると、自分が次に踏み出すべき一歩は、どこの方向に、どういう歩みを持つべきなのかというの、おのずと見えてきます。それは自分の好きでやってるんじゃなくて、社会性という大きな流れの中で自分たちの責任として前向きに担っていくことなんですね。

温故知新という言葉がありますが、自分自身が生きてる以上は21世紀に前向きに知新してるわけですから、あえて知新なんていう言葉をあんな

り意識しなくていいというふうに考えています。それが温故の実践と考えています。歴史に学ぶというのはどういうことかという、例えば貝原益軒という方の肖像画に、ある博物館で出会いました。確か福岡の博物館だったと思います。この肖像画の前に硯とか書物が描いてあるんですが、同時にお香が焚いてあるんです。やったーと思って、貝原益軒という有名な学者は、やっぱりお香の香りの中で読書されたり、ものを書いたりされたんだと確信します。貝原益軒という方のことを調べると、1630年ぐらいに生まれて、1714年に亡くなっておられます。1700年頃ということは、日本が鎖国に突入して海外とのコンタクトを断たれて久しい。しかしながら、その前の南蛮交易でもすごい物流が活発だったときの交易品が、京都とか江戸なんかにあふれ出して、それを日本の英知が品質などを見極めて、使い方を工夫された時代、それが寛永文化、元禄文化という時代なんですが、その時代の名を残す人が、お香を身近なところに使ってられたという現実に出会うわけです。また、石田梅岩という方のお名前に出会って資料館を訪問したら、石田梅岩という、京都の商いの中から道德教育をおこされたという有名な学者も、お線香が生活の身近にあったことを知りました。やはり石田梅岩も香りを楽しまれたのかと思ひ、石田梅岩を研究をされる先生方に聞きますと、いやいやそうじゃなくて、自分の講義、寺子屋みたいにして人々にもものを語る時に、時を計る道具として線香を使ってられたんだというふうなことに出会いました。実はこの石田梅岩の活躍された時代が、私の家がこういう商いをおこした時代でもあるんです。なるほど、線状のお香というのは生活に革命を起こしたんだと、単に仏様に使うものではなくて、火を絶やさないために、あるいは時を計るために形成され、そして平安時代から伝わるような香料のレシピをここに練り込む

ことによって、ほかにはない高度な香りを醸し出すことができる、すごい生活革命が起こっていたということを実感するわけです。それを、今日の年代の消費者の皆さんにいかにか伝えていくかというのが、私たちの仕事だと感じています。

香りを楽しむためには、中国や東南アジアから天然の香料を日本に運んでもらう必要がありまして、これは聖徳太子の時代から今日、そして未来の日本で天然の素材を楽しもうと思うと、こういうことが続くわけです。地球温暖化の話とは全く別の世界の話であります。実は石油と一緒になんです。日本国内で文化的な、あるいは高度な、高品質な生活を享受していこうと思うと、他の国々の産品を運んでいただいて、そしてそれを使いこなす知恵を持つてる私たちが、レベルの高い文化的な生活を享受できるという、このハード環境とソフト環境の関係性も見えてきます。ですから私たちは、こういう香料、漢方薬でもあるんですが、こういうものが実はいかに貴重品かということを経験として認識しており、それを使いこなしていく知恵というのは、歴史が育んできた知恵ということになります。

仏教のうえでお使いになるお香なんですが、どうしてそれが香華灯明として、明かりを灯し、花を飾って、お香をたくのか。仏教といいますと、多くの宗派に分かれて長い歴史があるのに、実はこの三つの一番基礎になる仏前の荘厳は、誰も疑いを持たずに、大きなお寺のご本堂でも、家のお仏壇でも、野辺のお地藏さんの前でも、この三つをきちっと整えるのです。それにはとんでもない普遍的な意味があると私は信じています。それがいったい何なのかというのを問い詰めて、自分の言葉で語ることが、やはりこういうお香に携わる私たちの仕事だと感じるんです。また、そういうものを多くの方が、とても京都的な生活文化、あるいは日本的な文化として認めてくださると、こ

れは歴史が育んだ説得力だというふうに感じています。そういったことを含めて、香という文字1字で表現される生活文化とその歴史を、私たちはメーカーとして商いさせていただく。それが私たちの家業から発展した、まだ小さい活動ですけれども、松栄堂という会社の本業だというふうに思うわけです。

よく家訓について聞かれるのですが、私の家には書いて伝えたというものはありません。口伝として祖父から聞かされて、またその祖父の言うことを、嫁いできた母がなるほどと納得して、私に語ってくれた言葉として自分の身が染められたというか、そういうふうを感じるんですが、「細く長く曲がることなく、いつもくすくすくすぶって、あまねく広く世の中へ」広がりを持つように語り続けています。お線香というのは細く、そして曲がっていたのでは商品価値はありません。きちっと真っすぐ。そして、そこに存在してても、火がついてないと仕事はしてないんですね。ですから火をつけてもらうのですが、花火のように人々の意識をぐっと引きつけるような強い火もあれば、ものを焼いたり料理したりするような炎もあるんです。でも私たちの火というのは目立つ必要もない、しかしながら小さく、くすくすくすぶり続けているということがお香にとっては非常に大事で、そして特定の社会とか、特定の人たちとか、特定のジャンルとかそういうところにだけ集中的に届けようという発想ではなくて、あまねく広く、今の時代でしたら日本国内だけじゃなく海外も含めて、広く日本の伝統的な香りに価値を認めてくださる方々に出会っていくことというのが、私たち松栄堂の仕事だというふうに考えています。

よく伝統と革新という言葉がありますが、私は常に「革新が伝統」だと、確信を持って考えています。歴史を学べばわかるんです。例えば千利休

という方のことを思っても、どれほどにその時代の革新的な方だったかということです。言いだすときりがないですが、それが社会性という力を得て、歴史に実績を残してきて、それが伝統として振り返られるわけですから、私たちは別に伝統を作ろうなんていう意識を持つ必要は全くないと思います。ただ、伝統という歩みを自分のコンテンツとか、肥やしとして、そこに根を張って学ぶかという姿勢が大事なんだと思います。

松栄堂の生産現場では、竹べらを使って昔からの作り方をしている「香房」という現場と、ボタン一つでかなりまとまった大量のものを生産していく「香場」という現場、この二つが常に並行して稼働しております。どちらがあるからいい、あるいはどちらを残そうとかそういう話ではなくて、両方をめりはりを持って、自分たちの生産力として運営していこうという、そういう発想を常に持っています。その一方でまた、もっと新しい生産方法もいろいろ挑戦しようとしています。答えを言ってしまうと簡単なことで、皆様が口に入れるタブレット、あるいは錠剤などといった、薬を作る打錠という技術でお香を作ります。すごくしっかりした世界レベルの機械メーカーさんがあって、薬をお作りになるための装置としてすごい実績があって、今さら何も考える必要はないんですが、実は今まで作ってみえたジャンルでは、7センチのスティックとか、コイル型のものとか、こういう複雑な形状は誰も挑戦されなかったんです。しかしながら私たちは、こういう形状こそが実は非常に重要で、こんな複雑な形状のものを正確に、常に完璧に作る技術というのは、松栄堂が培ったここ30年ぐらいの技術だと思います。

下にあるような紅葉や菊の形は、もちろん伝統的な形状ですけれども、こういうものを安心して伝統的な使い方ですべて使っていただくというのも非常に大事な要素だと考えています。

例えば火をつけると煙が出ます。火がある以上は煙がなくなるとは絶対いけないと思いますから、煙のないお線香というものは、松栄堂は絶対に市販してはいけないというのが私のポリシーなんです。しかしながら、その火や煙をコントロールする技術というのは非常に重要で、何%ぐらいに最終的な商品としてまとめるかというのは、技術的に非常に大事に研究、あるいは実践しています。

パッケージングについても、いかに共通パーツ化をして、環境素材のあるべき姿というものを考えるか、というのも重要な課題です。そしてこの短いスティック状のお香を焚いていただくためには香立てが必要なんです。従来は陶磁器とか、あるいは金属とか、私の若い頃は耐火プラスチックなどで非常にたくさん供給したものですけども、耐火プラスチックなどは石油産品ということで、環境によくないという論調の中で、何とかそれに代わるものにと苦しみました。海外生産でコストの安いものを、という発想は一切社内ではよしとしなくて、何とか、という中で、先ほどの打錠のあの機械が、この新しい香立を非常に低コストでたくさん、安定して作ってくれるようになりました。もう、じゃらじゃらとたくさん持って帰っていただいたら結構かと思えます。そして、お使いになったら庭先へばいと捨てていただいても、雨に打たれて普通の土にかえってしまいます。実は原料は土なんです。そういった開発、実践ということも前向きに取り組んでいます。

日本の山に木を植えようという、モデルフォレスト事業というのがあるんですが、松栄堂はやっぱり香料産業というか、香料をたくさん使わないと、私たちの伝統的な技術は発揮できないものですから、私たちが木を植えるのは、京都の山とか日本の山ではなくて、東南アジアの山に植えるべきだということで、たくさんはできませんがチー

ムを組んで、東南アジアに出向いて、現地の人たちと一緒に汗を流して、さまざまな植林に挑戦します。この植えたものが私たちのものだなんて全く考えていません。これをする事で何が一番魅力かという、私たちの香料を生み出す地域や人々ってというのは、どういう現場で、どういう人たちなのかということ、自分の身をもって体感して学ぶことだと思うんです。例えば京都で雨が降りました。今日は雨かと思って、そうか、あそこのスコールはすごかったよな、というふうなことをやっぱり思い出せる、また人に語れる、それが非常に魅力的で、身をもって現場に足を運んで、体験して、それを世を重ねて先輩から後輩へというふうな、重層的に資産として作っていくわけです。

また、日本の香り文化というのはとても日本的で、日本文化の一つだという認知をいただくことがたくさんあります。海外のさまざまな機会をいただき、美術館とか大学とか、あるいは在外公館とかそういうところで、日本の香り文化の実践的な紹介、あるいはレクチャー、あるいは研究ということにも取り組んでいます。

香りについて立ち止まって考えてほしいという願いを強く持っておりまして、何もお香だけじゃなくて、私たち人間は五感という感覚を駆使して日常を積み重ねるわけです。情報化社会とか、いろんな言葉で今の現代を呼びますが、情報社会の現実というのは、私は視聴覚の革命だと思っています。五感のうちの視覚、聴覚の二つがデジタルワールドで革命を起こしています。しかし、触覚、味覚、嗅覚という、物質と出会わないと本来の情報は得られないという、とんでもないプリミティブな、原始的な情報を得る器官があり、そのことのバランスの取り方というのは、視聴覚のウェイトが高くなれば高くなるほど、立ち止まって、そのずれを時々直す必要があります、そしてそ

れをまた次の世代の子どもたちに、そのことを一緒に実践して体験してもらうという責任が私たちにはあると考えています。そういう意味で、香りについて立ち止まって、エッセイにまとめてみませんかという呼びかけを始めるようになりました。藤本義一先生に審査委員長をずっとお務めいただいたんですが、今は鷺田清一先生に審査委員長を務めていただいています。泣かされたり、笑わされたり、楽しいエッセイを、本当に全国、あるいは世界の方々からもいただいて、毎年コンテストをさせていただきます。「お香とお茶の会」という催しもございまして、実はこの会は、この1年間、新型コロナウイルスのために全くできなくなりましたが、寄り合ってお茶をいただく、お菓子をいただくという、そういう伝統的な茶の湯とか聞香という芸道文化を体験、体感していただく催しです。その道にいらっしゃる専門家だけじゃなくて、一般市民の皆様も、学生さんも、気楽に身をもってそこに座ってみるといって、そういう機会作りというのを、これも長く、年に1回ですけども、東京や札幌も含めて主催をしております。

京都の烏丸二条に本社がありますが、そこに薫習館という建物をオープンしております。ぜひお出かけください。先ほど申し上げたように、今の社会というのはデジタルワールドが非常に前に強く出て、視聴覚で情報を得たかのように感じてしまっていますが、実際の香りの情報というのは、実際に現物に出会ってもらうことが本当に大事だと思います。例えば有名な香料で、ジャコウがあります。ムスクですね。フランスの香水でもムスクの香りっていうと、本当に最高級、日本のお香でも、平安時代のレシピを見ると、ムスク、ジャコウの比率というのが非常に高くあることがわかりますし、例えば演歌の歌の中にもジャコウの香りなんていうのが出て、キャラの香りとか、いろんな有名な香料が出てくるんですが、本当のジャコ

ウの香りをご存じの方ってほとんどいらっしゃらないんです。そういった匂いに直接出会ってもらい現場があります。それは、ここへ足を運んで、自ら一歩踏み込んでいただかないと出会えない。しかし、その気になれば、いかにも簡単に出会える、そういうテーマパークだと私は思っています。テーマパークっていうのは、立派な施設だけがテーマパークではなくて、一人一人が仕掛けの面白さっていうのを自分たちの中に発見することだと思えます。それは本当の香りに出会おうとか、あるいは歴史的な文章の一節の現場に立ち見ようとか、そういうふうな仕掛けを自分で設定し、見つけて、そこに身を置くことが、テーマパークとの出会いだと思います。この薫習館の1階に「かおりボックス」というのがあって、この三つの大きな箱に首を突っ込んでもらうだけで、お香といっても香りがいろいろ違うんだと体験してもらえます。奥のほうの柱へ行きますと、さっき申し上げたムスクの現物の匂いであったり、天然の匂いの体験ができます。ぜひ機会があったらお出かけください。

私の仕事の一つに、Lisn というブランドがあります。小さなブランドなんですが、このブランドの世界に出会ってくださった方は本当にファンになってくださいます。私の仕事は、お香という伝統的な日本の香りを作ってお届けすることですが、先ほどの烏丸二条の本店には、本当にたくさんの方が来てくださるんですが、それはお香というものに目的意識をお持ちいただいた方が、お買い物ももちろんですけども、例えば卒業論文で『源氏物語』の中に出てくる香りっていうのはどういうのか聞いてみようとか、製造現場を見学したいとか、いろんな目的で来てくださるんです。たくさんの方が来てくださるので安心してたら大間違いで、圧倒的なその他の方は、ここを通り過ぎておられるだけなんです。ここに立ち止ま

ろうなんていう発想を全く持ってられない方が圧倒的なんです。普段、気にも留められない方がもっと圧倒的なんです。そういう方々が、何これ、といて立ち止まってくださる、そういう発信の仕方を私自身が仕掛けておく必要というのをすごく感じるわけで、それが Lisn なんです。

若い頃の経験ですけれども、アメリカのあるショッピングモールを歩いておりましたら、ある食材店でバケツに入ったヒジキ、アラメ、ワカメが売ってありました。私が見て、ヒジキとアラメはわかりません。乾燥したその二つのものを見て、書いてあるからこれヒジキか、これアラメか、アメリカで初めて乾燥したものを手に取ったみたいなことですが、考えてみたら、ヒジキ、アラメ、ワカメなんて、とても fishy なものを、まさか醤油味で炊いて食べるはずはなくて、全部水で戻して、サラダに乗せて、ドレッシングをかけて召し上がってるわけですね。なぜそうするかというと、これらが海のミネラルをいっぱい含んで、健康食品だということを知っておられるからです。そういうときに、ある Fusion cuisine なんていう、ちょっと最先端いくようなレストランのメニューの中に、Shiitake ということを見つけました。それを向こうのレストランの人は、シイタケと呼んでたように思うんですが、それがシイタケとはわかりませんでした。私はそういうメニューを見ると、いつもポータベロマッシュルームとか、そういうヨーロッパのマッシュルームなんかを探したりするんですが、まさかシイタケがポータベロなんかには肩を並べて、Fusion cuisine のレストランのメニューにあるなんて、その当時思わなかったんです。そういうときにまた出会ったのが、Not Dog です。これはスペルが間違ってるんじゃないかと、私が行ったお店のメニューには Not Dog と書いてありました。私は最初、ホットドッグの間違いだと思って、お店の人に、間違っ

てるよって本当に言ってしまったんですね。でもそれは Not Dog で、そのベジタリアンのそのお店では、「うちはホットドッグなんて売ってないよ」と。なんとそのパンの中に挟んであったのはステーキされたお豆腐でした。もう本当にびっくりして、ホットドッグを先入観として持ってしまった私は、全く視野が固まってしまって、面白い提案だなと思ったわけです。それから Leotard にも学びました。この言葉に初めて出会ったのは英語のテキストブックでした。辞書を引いてみると、舞踏用練習着と書いてあるんです。今も辞書を引けばそう書いてあると思います。そのとき私がイメージしたのは、サンクトペテルブルグの雪が降る冷たい街の中に、どーんと重厚な建物があって、その2階の窓辺なんかにそった鉄の棒を手にしながら、先生の指導の中でクラシックバレエの練習をしている女の子たちのコスチューム、舞踏用練習着ですから、足元はもちろんトウシューズで、着てるコスチュームは白か黒か紺か茶色ぐらいのものをイメージしたんです。実は Leotard の本当の意味はそれで良いのです。しかしながら、それを私が英語で勉強したのと前後して、日本の国内の商店街にカタカナで、レオタード入荷っていうふうなことが書かれてる街並みになったわけです。それは皆さんがよくご存じの、ファッショナブルでとてもヘルシーで、そしてボディコンシャスで、ジャズダンスとかエアロビクスなんかに、そうして足元はトウシューズでなくて、ルーズソックスみたいな、ちょっとごっついソックスにテニスシューズみたいな感じでしたか、そういうスポーティーなコスチュームだったんですね。一つの言葉が全く新しいジャンルをマーケットに築いていく姿を目にしました。そのことが、私が日本で香というものを、香という言葉でしか話していなければ、もうそれは消費者の先入観の中に自分から踏み込んでいくことし

かできないことを気づかせてくれました。Incense という言葉を使うことで、全く新しい土俵を築いていくことができるということに気がついたんです。逆に、Incense という言葉をアメリカで言いますと、アメリカ人のすべての人がその言葉をもろろん知ってまして、彼らの先入観の中で、私の英語力で日本の伝統的な香りの世界を説明するのは不可能でした。しかし例えば KOH という言葉を使えば、何それと聞いてくれますし、『源氏物語』って知ってる？っていえば、聞いたことあるみたいな話になるわけです。あそこに出てくる香りが僕の仕事って言ったら、ちょっと待って、1000年も昔の香りを、君、仕事にしているのと、すごく関心を持って耳を傾けてくれます。というふうに、もちろん自分の本業は香として、絶対的な責任のあるバトンを預かってるわけですから、このことを会社のみならず一緒に大事に育み続けるわけですが、それと同時に新しい可能性がそこにあるということも、楽しくて仕方がないわけです。そういう意味で、この lisn というのも、ぜひ皆さんに一度お立ち寄りいただきたい、私たちのサイドブランドになります。2008年に広辞苑が改訂されたときに、カタカナの「インセンス」という言葉が広辞苑に収録されました。本当にうれしかったです。社内の担当してる人間は、やったーという感じで、一つの生活文化が日本の国内に定着しだしてるという実感を得た瞬間でもあったのです。

京都府はインドネシアのジョグジャカルタ州と姉妹州、姉妹府を提携していますが、昔、大きな震災があり津波でひどいダメージを受けられたことがありました。大概、支援金や支援物資を送ろうという発想になるんですが、そのときに、ジョグジャカルタで生み出されるさまざまな生産品を日本でマーケティングすることも、彼らの未来の一助になるという提唱をされる方があって、私た

ちもそれに参画をすることになりました。パティックとカルリックという、現地のテキスタイルを使って、におい袋を作ったり、お香を入れる香合を作ったりということを始めました。しかし日本の百貨店の店頭においてもらうことは難しいものでした。というのは、色落ちがするとか、もちろん水に濡れたりするとダメージがきつかったんですが、ほかのものに色を移してしまうとか。どういう染料を使ってるかとか、安全基準の問題とか、当初難しかったんですが、そういうものを現地の人たちと膝を突き合わせてさまざまな勉強会をする中で、安定的な、そして日本の百貨店の店頭でも責任を持って売らせていただけるようになりました。大きな仕事にはなりませんが、長続きしてずっと続けてるといって仕事が楽しくて仕方ありません。

革新が伝統、いろいろ切り口はありますが、「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。」と、『枕草子』の冒頭の文章ですが、この文章は日本人なら、子どもさんから、おじいちゃん、おばあちゃんまで、誰もが耳にして知ってるフレーズです。でも、「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは」っていうのは、京都の東山の山際だということまで踏み込んで考えてる人って本当に少ないのです。実はこの京都というテーマパークで、東の山がゆっくり白んでいく春のあけぼののイベントというのは、毎年繰り広げられてるわけです。ですから、年間パスを買って何回も通う楽しいテーマパークももちろんいいんですけども、全く無料で、自分自身のちょっとした気づきで、歴史のコンテンツの中に遊ぶ面白さという、そのための仕掛けが自分の中で発見できるかどうかというのは、一人一人に委ねられてるといって気づかされるわけです。歴史に学ぶというのを繰り返しますが、伝統への責任ですね、

これは別に京都だからではありません。どんな立場であっても、日本人、日本文化圏、日本語を使うということがあれば、日本文化圏に対する責任があります。そしてさっきも言いましたように、古いものを預かるだけではなくて、新しい土俵を作り出すこともチャンスがあるということ。それから、既成概念にとらわれずに、それを打ち破って新しい提案をするということ。それから、めりはりをきちっと、責任を持って楽しむということですね。中途半端にオーバーラップさせたり、中途半端に真ん中を取ったりというのは、やってはいけないことだと私は思っています。それから、自分自身が楽しい、だから提案したいという、本当に好きになることだと思います。

例えば絵一枚に出会って、あれ、お香を焚いていると思うわけです。絵の様子から少し考えてみると、江戸時代初期ぐらいかなということにたどり着きます。そして細かく見ると、3人の方がお香にかかわってるのが分かります。縁側にいる人は髪の毛をさわってもらってるんですが、後ろの人の左手に香炉があります。ですから、髪の毛を整える要素の中に、髪の毛に香りをたき移す、薫髪という生活文化があったことがわかるんです。床に置いてある白い紙は、お香を包んでた畳紙（たとうがみ）、封筒のようなものですが、そういうものも描いてますし、この2人の足元にある絨毯を見ると、何かしら南蛮渡来っていいですか、中国か、もう少し向こうのアジアの国から運ばれてきた南蛮文化の余韻みたいなものを感じるわけです。ひげのおじさんは、火箸を持って香炉を左手のひらの上に乗せて、灰をさわってる様子がわかります。お香を焚く準備をしてるわけです。そして、前の人と何か語らいながら、膝元には箱があるというふうに、お香をたく準備も楽しいことがわかります。そしてもう一人、この柱にもたれかかっている人は、手のひらに香炉を持っ

て、もう一つの手でその上を囲って鼻元に近づけて、立て膝をして座ってる。いろんな様子がわかるんですが、鼻元に持ってくる以上は、香りはすごくほのかだと思っんです。さっきの髪の毛に香りを移すたき方というのは、しっかり香りを焚いて演出して、強い香りを髪の毛に移すわけです。というふうに、目的に応じて火の強さ、灰の量、香炉の形、そういうものを使いこなしていく様子もわかります。そして、一人静かに鼻元に香炉を取り寄せて香りに向かうというのも、とても静かな、情緒や情景の中に遊ぶ、そういう時間だということが想像できます。柱にもたれかかって立て膝をして。決して正座をしなければ、ということではないんですね。皆さんでしたらいかがですか。私だったらこのときに、ボサノバか女性ボーカルのスタンダードジャズなんか聞きたいなと思っながらいつも楽しむ絵なんです。そういう楽しみ方を古くからしていたことが分かるし、私たちもしたらいいんだということなんです。

香炉に向き合って香りを鑑賞することを、聞香といいます。香を聞くという言葉があり専門的にはされていますが、私たちはどうしてもこういうときには正座をして、床の間のお軸をまず鑑賞する、そういう難しいものという先入観を持っってしまうんです。それはそれですごく大切なことですが、それでないといけないうことではないということがわかります。正式な聞香の寄り合いというのは、お家元のご指導のもとに、香道という世界が今もきちんと伝わっっておりまして、私たちもこれを勉強させていただきますし、それはそれで非常にまじめに取り組むわけです。

私が仕事をさせていただく中でいろいろ感じるものの一つなんです、私どもの会社の近くに京都の御所という大きな市民公園がありまして、そのエノキの大木がとてっかっこいいんです。果たしてこの木の目的はいったい何だろうと考える

ようになりまして、樹木の本懐ということを考えるんです。エノキというのは落葉樹ですから、冬になると葉っぱが全部落ちます。冬の日差しを受けると、ものすごくコントラストがはっきりして、またかっこいいんですよ。2月になって横にある梅園の梅が咲きだしますと大変綺麗で、まだエノキは葉っぱが全然ない状態ですが、これはこれでまた、とてっ立派です。いろんな時間に散歩しますと、エノキの根っこに腰をかけて学生さんが楽器の練習をしたり、昼間に行くと、お年寄りがここに腰をかけて休んでられたり、横の木陰で子どもたちがお弁当広げて輪になってたり、あるいは絵を描かれる方や、写真を撮られる方なんか、いろんな楽しみをしてられたり。そして夏になると、地面からセミがたくさん出てきて、この木を登って、抜け殻を残して、地ゼミがたくさん育っていきます。上のほう見ると、鳥の巣があったり、またほかの植物が寄生してたり、本当にさまざまな社会性を持ってこの木は活躍してるわけですが、果たしてこの木はこれが目的だったかと思うと、そうではないんじゃないかと私は考えるようになりました。根っこと土壤の関係というのを誰も気にもしないんです。私も気がつかなくっただけですが、これだけ大きな木が、こうやってここに育っってきたということは、これをこまめに育てることのできる豊かな大地がそこにあっただけで、この木は誰に遠慮することなく、思い切り根っこをここに張ることができた。その結果として、地上にこれだけの大きなパフォーマンスを保ってるわけです。先ほど申し上げたようなことが、この木の目的だったんでしょっか。そうして、もしもその目的を全うしたことで、ここにあっった土壤という大地がレベルダウンして、劣化してしまったら、この木はここになくっったほうがいいということになります。この木の願っいは、自分もいずれはその一助となって、この大地の力

になりたいというのが、この木の本懐だと私は感じるようになりました。より豊かな土壌を、自分自身もその一助となって次の世代に託していくことは、多分、この木がここに存在する一番の大きな理由だと思うんです。そして次の世代がその豊かな大地に、またどんな根っこを張るのか、全くそれは次の世代の自由でもありますし、責任でもあります。そして、そこでどういうパフォーマンスをするのか、それは次の世代を信じることしか、この木にはできないのです。というふうなことが、実は世代を継ぐということの意味じゃないかなと感じるんです。私たち、あるいは私の会社が社会的なパフォーマンスとして、社会的に存在して、そしてその結果、社会にネガティブな要素を残していくんだったら、はっきり言って存在する必要もないし、その企業活動をするための根幹になってるファミリービジネスが同じようなネガティブな要素を持ってるんだったら、存在する必要はないわけです。

新型コロナの感染症がこの1年続いて、今も厳しい環境が続きますが、その間に私がちょっと感じたことがいくつかあります。古い額が壊れかけて、もうその額は処分しようと思って、1枚の写真を取り出したんです。それは私の祖父母が若いときの写真で、後ろに男の兄弟3人が写ってました。長男は私の父です。その写真は前から何度も見てきたけども、傷んだ額を処分するために取り出したときに、裏面に「復員記念」という字を見つけたんです。それは私の祖父の字でした。非常に端正な字で書いてました。昭和21年9月1日、終戦の翌年の9月1日、この日が私の曾祖父の祥月命日なんです。その日に家族みんなそろって墓参をして、そして帰りに撮った記念写真。長男、次男は中国大陸から無事に帰ってきて、三男は内地から帰ってきて、3人の男の子が本当に元気に、また顔を揃えてくれて、亡きお

じいさんの祥月命日に墓参ができたという、何ともいえない表情なんですね。そのときに、周りの親戚とかご近所には、帰ってこれなかった方、行方のわからない方、あるいは白い箱に収まって帰ってこられた方も、さまざまな現実があったと思います。その中で、無事に五体満足で3人の男の子が揃った、何ともいえない緊張感のある写真だということに気づかされて、私の祖父や父の時代にこういう現実があったというふうなことを思うと、この1年、新型コロナに直面してる私たちが、もちろん大変なんですけれども、ネガティブに悲壮感を持って、あかん、あかんと言っているほど知恵のないことはないと感じます。それよりも、さまざまな過去の歩みを知って、自分たちは自分たちなりに、今の一日一日をどう重ねていくかというのは、やっぱり前向きに考えるべきだと思つづく教えられました。もう一つ思い出したことです。これは話題にしていいのかどうかちょっと分からないんですが、昔、テクノジャンボの機長さんの真後ろの席に、5点式のシートベルトを締めて、ある空港に着陸した、そういう体験があります。安全の立場から機長さんはやってはいけなかったことかと思うんですが、あのときの、本当にテクノジャンボですから、機長と副機長さんがいらっしゃって、自分と3人の小さな空間です。滑走路はどこにも見えないんですけど、そこへだんだん飛行機が降りていって、ふっと気がつくと、この小さな部屋の後ろに350人、400人の命がぶら下がってるわけじゃないですか。とんでもないことなんだという現実に気がついて、本当に手がもう汗でべとべとになりました。そのときの、パイロット、副パイロットのあの緊張感と責任感、それと、どんな環境であっても自信を持って対応しておられる、あの姿っていうのを私は、このコロナの中で、会社の若いみんながいろいろやってる中で、自分の立場に照らして思い出

した次第です。これからもまた、いろんなことが続きますけれども、家業を預かるというのがどうということかは、世の中にたくさん学ぶヒントがあると思っています。

このコロナの1年、弊社で始まって新しい動きの一つをご紹介します。

「ことごとワゴン」といいます。今、キッチンカーが活躍していますが、その中にメロンパンの販売車のように見える、実は私たち松栄堂の香りの車が走ってます。特に関東方面で活躍を始めているのですが、ぜひ探してください。見かけたら近くへ歩み寄ってもらって、何これ？とって立ち止まっていただくと、香りの楽しさというのを体

感してもらえらると思います。こんなふうにも、いろいろ新しい取り組みをしております。本当にありがとうございます。私も一緒にまた勉強していきたいと思っております。以上です。

大山 それでは、ご質問を受けたいところなのですが、ちょっと時間の関係で、押していますので、のちほど畑社長にはパネルディスカッションのほうにもご登壇をいただきますので、その中で皆さんからのご質問等にお答えをしていきたいと思えます。そうしましたら、畑社長、本当にすばらしい話をありがとうございました。いま一度皆さん、拍手をお願いいたします。

一同（拍手）